Humor、および、ユーモアの定義とおかしみの概念に対する一考察*

森田　亜矢子

抄録

本論文の目的は、心理学の先行研究におけるユーモアの定義を概括し、用語と用法を整理して、概念を明確化することである。初めに、検索エンジンを用いて主題に関する 147 点の文献を収集し、研究手法と定義法にしたがい分類した。次に、定義の内容を整理して照合した。その結果、互いに相容れない複数の定義の存在が明らかとなった。そこで、語義を確認するため、英語辞書と日本語辞書を参照したところ、両言語間でユーモアの語義に相違があることがわかった。本研究が明らかにしたのは、次の 3 点である。(1) 英語の humor に相当する日本語の概念は「おかしさ／おかしみ」である。(2) 日本語のユーモアは、英語の humor と異なる語義を有している。(3) humor（おかしさ／おかしみ）という心的概念は既存の概念に置換不可能な特徴を持つ。これをふまえ、研究手法に関する示唆を記述した。

キーワード：ユーモア、笑い、定義、おかしさ、おもしろさ

本論の目的は、心理学を中心とするユーモア研究において、これまでユーモア概念がどのように定義されてきたかを概括し、概念の明確化を試みることである。

1　問題と目的

ユーモアは敢えて定義を試みるほどの難解な概念ではないと誤解されがちである。誤解を招く理由は複数ある。第一に、おかしさを体験するために努力はいらない。この点をユーモア以外の体験に例えるなら、美しい振る舞いを見て感動することに努力がいらないのと似ている。第二に、おかしさの体験は普遍的である。おかしさの体験は文化を超えて共通する心的事象であり、大人から子どもまで経験可能な体験である。ユーモアは暮らしの中にあり、些細な会話の中でも生じる。また同時に、技芸に長じる人々の手によって洗練される文化の一側面でもある。おかしさの感知が、さまざまに人の精神活動と結びついている事実は、それが心の基礎的な働きであることを示す。第三に、ユーモアの感知は審美的体験である。対象にユーモアを感知するか否かの判断は直感的で自明であり、誰かの解説を必要としない。しかし、言葉で説明するのは難しい。ユーモア体験の根底にあるのは、個人のなりたちにもとづく価値観であり、それを相対化することは体験を色褪せたものにするため、忌避されがちである。ユーモアを定義する難しさと、美の本質を定義する難しさには、相通じるものがある。

心理学は概念を用いて理論を構築する学問であり、研究手法が質的であるか量的であるかを問わず概念の明確化は必要な作業である（村山，2012）。よって、本論文では先行研究におけるユーモアの定義を概説するとともに、概念の明確化に寄与することを目的として用語と用法の整理を行う。

2　先行研究

笑いとユーモアはどのように呼び分けられてきたか

手元資料の中で、ユーモアの心的機序を紹介するもっとも古い和文献は、入谷（1979）の記事である。入谷は、海外の最新理論として 4 つの理論群を解説している。優越理論、不調和理論、緊張緩和理論、精神分析理論と呼ばれる 4 つの理論群は、項目名称や分類基準の更新を経て今日のユーモア理論の基礎を成している。本節の主題はそれらの総称であり、4 つの理論群が、笑いの理論ともユーモアの理論とも呼ばれてきた点である。

たとえば、入谷の記事のタイトルにはユーモアという単語が掲げられており、精神分析理論の提唱者であるフロイトの論考のタイトルもユーモアである（Freud, 1928 加藤・石田・大宮訳 2010）。この理論を心理学誌上で初めて紹介した上野（1992）も、ユーモアの理論として引用している。一方、同理論を解説した小此木（1979）の記事のタイトルには、ユーモアと笑いが併記されている。

古典的文献では、笑いという用語だけをタイトルに掲げる形式が主流である。優越理論の主要論者であるSpencer（1860）は自らの理論を笑いの理論と名づけ、哲学者のMorreall（1987）は4つの理論群を「新しい笑いの理論（A new theory of laughter）」と題して紹介しており、日本笑い学会の初代会長である井上（2004）も、同理論群を笑いの理論として参照している。近年では、笑いの哲学と題する書籍（木村，2020）の中で、同理論群が紹介されている。

論集や書籍を見ると、タイトルに笑いとユーモアを併記して明確な区分を行わないものが多数ある（e.g., 雨宮，2016；Billig, 2005 鈴木訳 2011；木村，2010；井上・織田・昇，1997；織田，1979；佐金・佐伯・高梨，2020）。この傾向は、国内外を問わない。つまり、同じ4つの理論群が、笑いの理論ともユーモアの理論とも呼ばれてきたのである。

笑いとユーモアの使い分けを試みた論考もある。織田（1979）は、笑いをユーモアと呼ぶのは混乱のもとであるとして、「笑いを起こす原因を『おかしさ』と呼び、おかしさによってひき起こされる感情を『笑い』と呼ぶ（p.209）」と記している。この定義は、笑い学に受け継がれている（e.g., 井上他，1997）。

一方、心理学では、笑いは感情ではなく身体表現であると考えられてきた。心理学辞典には、笑いが「刺激に対する反応」であり、「特にユーモア（おかしさの感じ）体験に伴う人間に特有[1]ともいわれる身体反応、特に顔面を中心とする表出行動である（高下，1999 p.912）」と書かれている。心理学の領域では、笑いはヒトの主要な身体表現とみなされている（松阪，2021；中村，2001；志水・角辻・中村，1994）。

ただし、笑いとユーモアをほぼ同義に扱う論者は、心理学の内外に存在する。笑いを考察したMorreall（1983，森下訳 1995）の著作は、タイトルのlaughterをユーモアと翻訳されて和訳出版されている。翻訳者自身もユーモアの社会学と題する書籍を発表し、その中で先述の理論群をユーモア理論と名付けて紹介している（森下，1996）。別の識者は、ユーモアの心理学と題する書籍の冒頭で「ユーモアは歴史の浅い外来語で、笑いの方が意味が広い」と述べて、ふたつの用語を同義に扱うのが望ましいとの見解を示している（雨宮，2016 p.1，p.9）。

たしかに、日常会話では、笑いとユーモアが意味する領域はオーバーラップしている。「笑いを誘う」や「笑いをとる」といった表現は、暗にユーモアの存在を意味している。また、ユーモアを扱う芸能を指して笑い芸と呼ぶ用法がある。こうした用法は、日本語における表現の豊かさを示す現象でもある。

本論の目的は、慣用表現の是非を論じることではないし、笑いを心理学の研究対象から排除しようと主張することでもない。笑いの表出はユーモア体験の構成要素のひとつであり、定量的研究において、笑いがユーモアの指標として有力な選択肢となるのは必然である。笑いはユーモアに対する反応として重要であるだけでなく、生理的・認知的なフィードバックを通して心的体験に影響を与える。そもそも精神機能を司るのは脳であり、精神と身体を厳密に切り離すことは困難である。笑いは心理学における重要な研究対象であり、笑い研究とユーモア研究は、今後も体験のプロトタイプとバリエーションの両方を共有しながら相補的に発展すると期待される。

しかし、笑いとユーモアは同義ではない。また、笑いはユーモアと関わりなく喜びや社交の挨拶でも生じる。これらの事実を鑑みれば、心理学では笑いとユーモアを意識的に使い分けることが必要である。次節以降では、先行研究を参照しつつ心理学の文献におけるユーモアの用法を確認する。

文献の検索と収集の手順

文献の収集は2023年1月に行った。まず、J-Stageの検索エンジンを用いて、一般公開記事を対象に、記事タイトルに「ユーモア」、資料タイトルに「心理」を指定して検索を行った。その結果、128点が検出された。続いて、一般社団法人日本心理学諸学会連合のサイトに総会情報[2]がある学会のうち、組織の名称に心理を冠する団体の学会誌を検索対象にしたところ、新たに3点の論文[3]が追加された。次

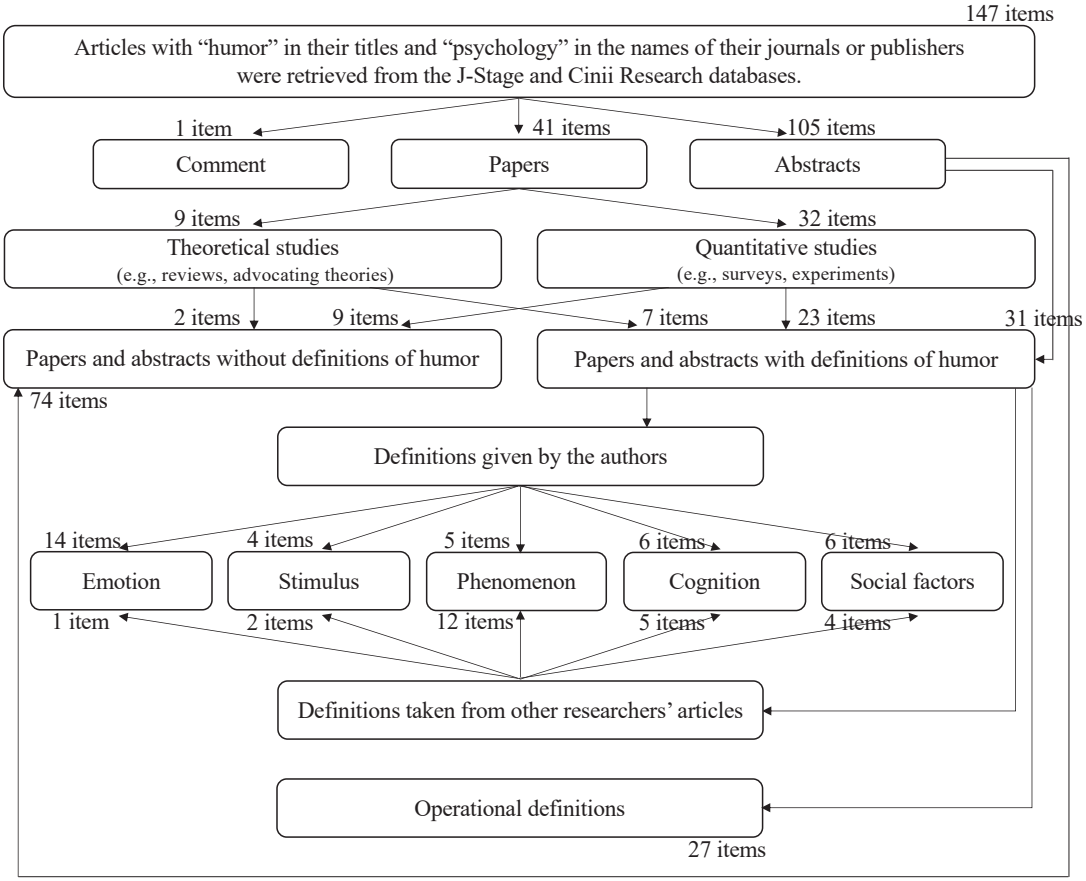

Figure 1　Classification flow chart of the definitions of humor. Reviewed articles were classified by the following elements. The cumulative number of items reviewed are reported next to each corresponding box.

に、Cinii Researchで、同じ検索を行ったところ、新たに文献17点が検出された。このうち、学位論文の審査要旨1点を除く[4] 147点が、最終的に収集した文献の数である。その内訳は、論文41点、コメント論文1点、抄録105点である。本論文では、査読を経ていないと思われる大会発表原稿や論文も参考文献に含める。その理由は、本論文の目的がユーモアの定義と用法を調べることだからである。

収集した147点のうち、本文中にユーモアの定義が記述されていたものは、論文30点、抄録31点であった。論文の種別では、定量的研究32点のうち23点、定性的研究9点のうち7点に、定義が記述されていた。定義の示し方は3種あり、1種目は操作的定義、2種目は先行文献からの引用、3種目は論文の著者が自らの言葉で定義を示す方法であった。このうち1種のみを用いる文献もあれば、複数を用いる文献もあった。尺度によらない操作的定義の記述がある文献の数は27点であった（Figure 1）。

ユーモアという単語は、認知度が高いものの使用頻度は低い外来語である。それでも、過半数の文献には定義の記述がなかった。その理由は、ユーモアという単語の意味が、説明しなくてよいほど明快であると考えられてきた、また同時に、説明することが難しい概念だったからであろう。そうした中で、ユーモアを果敢に定義する試みも行われてきた。

各文献におけるユーモアの定義は多種多様であり、所属分野は、教育、社会、医療、人格、情動、産業等に分かれ、アプローチは基礎から実践まで幅広い。そこで本節では、定義の提示方法にもとづき、論文の著者が自身の言葉でユーモアを定義している文献と、先行研究の定義を引用する文献、操作的定義を提示する文献の順に概説する。

『心理学研究』におけるユーモアの定義

日本心理学会の誌上に初めて掲載されたユーモア研究論文は、好みを測る尺度の開発を報告したもの（上野，1993）である。上野はユーモアを「おもしろさ、おかしさ、という心的現象」と定義している。これは、のちに、論文と抄録の両方でもっとも多く引用される定義である。社会心理学的研究（宮戸・上野，1996；塚脇・樋口・深田，2009；塚脇・越・樋口・深田，2009）や、心身の状態とユーモアとの関わりを扱う研究（渕上・石田，2019；椙本・山﨑，2010）を含む17点の論文が、この定義を採用している。上野の定義の影響力を、被引用数の多さが示している。

一方で、ユーモアを知覚の過程や情動に限定して定義する立場もある。ユーモアの広告効果を調べた李（1996）は、ユーモアが知覚されるものであると述べている。説得効果を検討した牧野（1999）は、「『おもしろい』『おかしい』と知覚する一連の過程」がユーモアであると述べている。李と牧野が知覚の観点で定義したのに対して、ユーモアを感情として定義する論者もいる。野村・丸野（2008b）は、「おもしろさ、楽しさという一過性の愉悦（mirth）の情動」や「『おもしろさ』と『楽しさ』の間の一連の情動」であると定義し、伊藤（2009）は「一過性の感情反応」だと定義している。

ユーモアを主題とするパーソナリティ尺度の項目を見ると、ユーモアという単語には刺激そのものを指す用法がある。一例として「単純でわかりやすいユーモアが好きだ」、「人間くささのある笑い話や、ユーモアが好きだ」（上野，1993）、「人を救うようなユーモアが好きだ」、「ユーモアを使って仲を取り持つ」（宮戸・上野，1996）、「人をからかうようなユーモアを言う」、「ほのぼのとしたユーモアを人に言う」（塚脇・深田・樋口，2011）、などが挙げられる。塚脇・平川（2012）はユーモアの多義性に言及しつつ、「おもしろさや可笑しさを生起させる刺激を指す概念」であると便宜的に定義している。

これとは対照的に、おかしさを感じさせる刺激の総称としてユーモアはそぐわないと指摘する葉山・櫻井（2008）は、ユーモアが「ポジティブな側面を強調して捉える傾向」があると述べて、ユーモアという単語の使用を避け、冗談（joke）という用語を採用している。彼らは、冗談を「ある個人が、他者におかしさを感じさせることを意図して表出する言葉」であると定義し、攻撃性や性衝動に基づく内容も含まれると述べている。

他方で、丸山・藤（2017）による「おもしろさやおかしさをもたらすやり取り全般」という定義には、ジョークのように独立したネタではなく会話の中で自然に生じるおかしさも定義に含まれる点が特徴的であるが、別の論文では「おもしろい、おかしいといった感情を喚起しうるユーモア的な話題（丸山・藤，2022）」とも定義されている。一方、秋元・宮澤（2011）の論文には、ユーモアをアイロニーの属性とする記述があり、刺激ではなく性質であるとしているところが他の定義と異なる点である。

ユーモアの多義性は国内の文献に限らない。英語で出版されたレビュー（Martin & Ford, 2018）では、ユーモアの用法の広さが批判的に検討されている。著者のMartin（2007）は、ユーモアを「笑いの対象となるすべてのもの」であると操作的な立場で表現しており、ユーモア尺度の日本語版を作成した高岡・松見（2017）は、この定義をふまえている。

3 用語の検討

Oxford心理学辞典の記載

ユーモアという単語はラテン語のhumorに由来し、西欧文化とともに日本に伝わった外来語である。よって、ユーモアの語義を述べるには、歴史的考察が必要となるが、本論文は心理学におけるユーモアの用法を検討することにあるため、現代の国際語として心理学論文の言語にもっとも多用される英語の語義を参照する。

Oxford English Dictionary（2003）に記載されたhumorの第一の語義は、おかしさや滑稽さという質（the quality）、とくに言語で表現されるものであると書き添えられている。第二の語義は、機嫌の良し悪しと関わる気質である。第三の語義は体液である。別の英語辞書（Deuter, Bradbery, Turnbull, 2015）の第一義は、任意の対象を滑稽でおかしくする質や、可笑しいものを笑う能力（the ability）である。また、Oxford心理学辞典（Coleman, 2006）では、滑稽や機知やおかしみを感じさせて笑わせるすべてのもの（anything）と説明されている。以上をまとめ

分類	項目	大辞泉（1995）	日本語大辞典（1995）	日本国語大辞典（2009）	広辞苑（2018）	大辞林（2019）
社会	人の心を和ませる	○				
	人を傷つけない			○		
価値	品の良さ	○	○	○	○	○
状態/特性	ゆとり			○		
	暖かみ		○			
	寛大さ			○		
	機知に富む					○
作用	笑いを誘う	○				
	思わず微笑させる					○

Figure 2　日本語の「ユーモア」の語義の解説文に使用される形容表現

ると、humor の第一義は、性質や能力であるといえよう。

すなわち、国内のユーモア研究で引用数が最多の定義である「おかしさやおもしろさという心的現象」という概念は、英語辞書における humor の第一義と同一ではない。用法と解釈の相違が生じた背景には、日本語と英語の語感の違いがあると推測する。日本語のユーモアが英語の humor と異なる語義や用法を持つならば、その異同を記述する意義がある。

国語辞典の記載

国語辞典には、英語辞書にない描写がある。その描写とは、ユーモアと呼ぶべき対象の範囲を明確に定める表現である（Figure 2）。例を挙げると「人の心を和ませるようなおかしみ。上品で笑いを誘うしゃれ（松村，1995 p.2696）」、「人を傷つけない上品なおかしみやしゃれ。知的なウィットや意志的な風刺に対してゆとりや寛大さを伴うもの（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部，2009）」、「品の良い洒落・こっけい。暖かみのあるおもしろさ・おかしみ（梅棹・金田一・阪倉・日野原，1995 p.2221）」、「上品な洒落やおかしみ。諧謔。（新村，2018 p.2988）」、「思わず微笑させるような、上品で機知に富んだしゃれ（松村・三省堂編集所，2019 p.2787）」、などである。

これらの辞書の解説は、ユーモアが「ポジティブな側面を強調」されやすい用法を持つという葉山他（2008）の指摘と一致する。夫婦間の葛藤におけるユーモアのコーピング効果の研究（阿部，2018）では、「互いの気持ちが和むようなおかしみ」と限定的に定義されている。ユーモアのポジティブな側面に焦点化する用法は保健や医療の領域では主流であり（e.g., 丸山・藤，2017；椙本・山﨑，2011；椎野，2011）、おかしみを「ユーモア」と表現すること自体が、ポジティブな側面に限定して論じることを予告する機能を備えている。攻撃的なユーモアが「ブラック・ユーモア」と呼ばれて特例の扱いを受けるのは、その一例である。

ユーモアと人格の関係を重視する見解もある。「ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味である」という夏目漱石の一文[5]を引用し、ユーモアが「その人の無意識も深くかかわる生の力なのではないか」と問う論文（橘・運上・間籐・真壁・浅田・池宮，2012）もある。初期心理学では、humor は単なる滑稽や機知ではなく、理想的人格の特徴として研究されていた（e.g., May, 1953 小野訳 1970；Maslow, 1968 上田訳 1988）。近年では、人格的な徳や強みとみなす研究もある（Peterson & Seligman, 2004）。ただし、こうした解釈は英語の humor の第一義ではない。

これと対照的に、日本では、美的価値を反映する概念を、ユーモアの第一義としてきた。松尾芭蕉や坪内逍遥らによる国文学作品や思想のなかに、美的価値を備えたユーモアの概念を見出すことができるとも指摘されている（e.g., 阿刀田，2003）。

ユーモアが外来語であるからといって、英語の humor と異なる語義を有することがただちに誤りであるとは言えない。安易に語義の統一を図ることは、過去に培われた思想や学問の系譜を断つことになりかねず、現存する言語文化をないがしろにすることにもなりかねない。語の意味は、時代や文脈に応じて変化するものであるし、学術用語が国語辞書の定義と相違すること自体は珍しくない。しかし、心理学が言語を用いてデータを採取する手法を取る以上、

一般的な用法を理解した上で、用語を適切に使い分ける必要がある。

国内で行う調査や実験において、英語のhumorをそのままカタカナ表記すれば、被験者の誤解を招きかねず、データの質を損なう恐れがある。とくに、上品でも温かくもないhumorに関する調査や実験を行う際には、ユーモアというカタカナ表記を避けたほうが良いであろう。

では、どのような日本語表現が英語のhumorに相当するだろうか。この問いに対し、本論文では、用語の選定と調査手続きに焦点を当てて考察する。

用語の選定

先行研究の定義で、もっとも多く使われた表現は「おもしろさ」または「おもしろい（以下、おもしろさとする）」であり、次が「おかしさ」または「おかしい（以下、おかしさとする）」であった。「おもしろさ」を使用する論文は31点、「おかしさ」を使用する論文は24点であった。著者自身の言葉で定義した論文では、「おもしろさ」が15点、「おかしさ」が12点であった。ふたつの用語のうち、英語のhumorの訳語として妥当性が高い用語は「おかしさ／おかしみ」であろう。なぜならば、おもしろさはhumorの体験を必ずしも意味しないからである[7)]。

広辞苑第7版（新村，2018 p.449）を紐解くと、「おもしろい（面白い）」の項には、(a) 気持ちが晴れるようだ。愉快である。楽しい、(b) 心をひかれるさまである、興趣がある。また、趣向がこらされている、(c) 一風変わっている、滑稽だ、おかしい、(d) 思う通りで好ましい、と解説がある。実際の用法を例に挙げると、冒険小説を読み終えたあとの「ああ、おもしろかった」は (a) に該当し、「この調査結果はおもしろいね」は (b)、あてが外れて「おもしろくない」は (d) に該当する。これらはすべてhumorと無関係である。おもしろさは語義が広く、「一風変わっている、滑稽だ、おかしい」というhumorの意も含む。したがって、ユーモアに対して「おもしろい」と感想を述べるのは、正しい用法である[6)]。本節の焦点は、その用語の第一義がhumorの体験か否かであり、答えは否である。

おもしろさは、感動体験の指標のひとつにもなる。たとえば、観客にとっておもしろい舞台とは、観客を高揚させたり惹きつけたりする舞台、すなわち、心を動かす舞台であり、観賞後も余韻が残るほどのインパクトを持つ舞台である。それらは、スポーツ競技やスリリングな映画作品にも通じる。ある感動やインパクトがhumor体験であると断定するには、その体験にhumorの本質が伴うか否かを確かめる手続きが必要となる。この手続きとは、調査や実験で使う刺激にhumor（おかしさ）を感じるかどうかを被験者に二値的に尋ねるプロセスである。回答が二値で良い理由は、主観的なおかしさの評定が感動体験の総合的な再評価であって、humorそのものの質に対する客観的評価ではないからである。

humor体験のインパクトは、刺激の感知に先立つ心的状態や、おかしさの感知と共起する気分の強度に影響される。さらに、刺激以外の要素、たとえば演者の技能や場の雰囲気にも影響される。よって、体験のインパクトは刺激の特性に還元できない。

先行研究では、「愉快な・嬉しい・楽しい（李，1996）」、「愉快である・つまらなくない（児玉・川森・高本・深田，2004）」、「笑ったか・話に引き込まれたか・印象に残ったか（野村・丸野，2008a）」などの測定値を「ユーモア度」の指標としている。一方、永瀬・田中（2015）は、これらが体験の強度を表すものであると指摘し、題材のわかりやすさがhumor体験の強度に影響すると述べている。また、落語の魅力を調べた増山（2002）は、オチの容易さや話のリアルさが「おかしかった」という印象を高めると述べている。刺激属性の魅力、状況認識、対象への好感度や内輪意識といった、humor体験を魅力的にする要素を調べて選定することは、今後のおかしみ研究の課題である。

ここで確認しておきたいことは、愉快さ・楽しさ・おもしろさ・嬉しさ・幸福感・高揚感などのうち、わずかひとつがおかしみと共起してもhumor体験だと言える点である。裏を返せば、おかしみ以外のすべてが共起しても、humor体験とは言いきれない。研究者がhumor刺激として選定した素材に対して被験者もhumorを感じるとは断定できないことを考慮すると、humor（おかしさ）を感じるかどうかを被験者に尋ねることは、データの妥当性を保つ意味でも有用なプロセスである。

4　概念の検討

前節では、英語のhumorの定義が、刺激の性質や能力であることを確認した。ただし、おかしみは、対象物に初めから備わる性質ではなく、それを感知する人が見出すものであることを神経生理学の知見が示している。よって、本節では、便宜的に、次のように用法を定める。humorが、対象物に備わった客観的性質であるとみなすほうが自然な言い回しに思える場合は、その性質をおかしさと表記する（例として、「喜劇のおかしさ」）。他方で、おかしさを感知する人の心の働きを意識する場合は「おかしみ」と表記する。

おかしみより適切にhumorを表す心的概念があるならば、あえて新しい訳語を持ち出して議論を複雑にすべきではない。よって、本節では、概念の重複を検出するため近接概念との比較検討を行う。比較対象は、楽しみ、美、喜び、の3つの概念とする。楽しみと喜びはおかしみと共起しやすい感情であり、美にはおかしみの本質に通じる特徴を見出すことができるからである。感情概念を対象に選んだ理由は、ユーモアを感情とする定義が和文献に複数あり、また、humorの感情的性質の重要性が英語文献でも指摘されている（e.g., Martin, 2007）からである。

楽しみとおかしみの相違点

一般的に、楽しみは気分であり、おかしみは情動である。楽しみは純然とした快であり、その対象は高く評価されるが、おかしみはそうではない。趣味の活動を例にとると、絵画鑑賞を好む人は鑑賞行為を楽しむと同時に絵画の存在意義を高く評価する。これに対して、おかしみの主因となる対象の性質は、価値を低められたり、その低さを強調されたりする。

おかしみは、苦悩や悲しみの原因に対してさえ、時には成立し（デーケン，1995；South, Elton, & Lietzenmayer, 2020）、苦痛を感じるテーマについて話し合う手段になる（Kuhlman, 1984）とも指摘される。そうしたおかしみは、言葉遊びのように明確な娯楽の形態を必ずしも伴わない。自己の失態に滑稽を見出す体験も、楽しいばかりではない。以上の考察より、楽しみという概念が、おかしみの概念を包摂しないことがわかる。

美とおかしみの相違点

美とおかしみには共通点がある。美の特徴と指摘される脱現実性と生へのコミットメント、さらに、無目的で、それ自体が目的を生み出す性質（佐々木, 2019）は、機序は異なるが、おかしみに共通する。美は、汚穢や逸脱の中にも見出されることがある。この点も、おかしみに共通する。

一方、美は緊張が持続する体験であるのに対して、おかしみは緊張と緩和の両方からなる体験である（Kant, 1914 牧野訳 1999）。美は、自らの価値基準に適合する性質に触れて生じる体験であり、その性質を保存し所有したいと願う心理を呼び起こすが、おかしみはコミットメントの解除であると指摘される（Hurley, Dennett, Adams, Jr., 2011；木村，1983）。美は高揚感を伴うが、おかしみにも伴うとは限らず、両概念の心的構成要素が異なる次元に属することを示す実証的研究もある（Auerbach et al., 2016）。

美とおかしみは排反関係にあり、ある事例に美とおかしさを同時に見出す場合でも、おかしさの主因となる性質の意味や価値は増大しない。優れた舞台人がみせる技の美しさや、熟練の芸がもつ技の妙は、観客の心を高揚させるが、それ自体がおかしいわけではない。それでいて、技芸の美が対象への本質的な理解を変え、おかしみの質そのものを変容させることもある。

この二つの概念の関係性を、学際的かつ学術的に考察することは、今後の重要な課題である。

喜びとおかしみの相違点

笑い芸と呼ばれる技芸のすべてがおかしさで観客を笑わせるわけではない。しかし、これまで、悦楽の笑いとおかしみの笑いは混同されがちであった。人気の技芸が生み出す快には、観客が待ち望む展開が実現する喜びも、しばしば含まれている。観客との共通点を強調して共感に訴えかけ、親近感や内輪感覚を刺激して喜びの笑いを引き出す手法もある。

精神分析理論（Freud, 1905 中岡・太寿堂・多賀訳 2010；Freud, 1928 加藤・石田・大宮訳 2010）や、それにもとづく優越感情理論（e.g., Gruner, 1997）は、勝利や優越、性的欲求充足の快感をおかしみの快として扱う。Gruner（1997）は、すべてのおかしみを人間関係のゲームと説明し、ささいな言葉遊びの快

すら優越感に由来すると主張している。

危険や破戒的行為を面白がる心理や、「人の不幸は蜜の味」と表現される喜び（シャーデンフロイデ）も、おかしみと共起しやすい（e.g., Billig, 2005 鈴木訳 2011）。人の不幸を喜ぶ心理は、3つの非道徳的人格特性である Dark Triad（マキャヴェリアニズム、サイコパシー、自己愛傾向）の中核的特徴とされる冷淡さ（Zeigler-Hill & Marcus, 2016 下司・阿部・小塩訳 2021）に通じる。おかしみや攻撃的ジョークを好むパーソナリティ特性の尺度項目と Dark Triad の構成要素との相関関係も指摘されている（Deckers & Ruch, 1992；Martin et al., 2012）。

性的または攻撃性の高い humor を好む傾向と、遺伝的性質や欲求との関連を指摘する研究もある（Ruch & Hehl, 1998；Weber, Ruch, Rieman, Spinath, & Angleitner, 2014）。欲求充足の快はおかしみではないから、一部の人々にとって性的で攻撃的な humor がとりわけ快感をもたらす理由は、喜びによるのであろう。

喜びの原因は好ましいできごとであるのに対して、おかしさの原因は予期に反する展開や違和感をひきおこす事象である。よって、喜びはおかしみを包摂しない。

以上の記述より、おかしみは、楽しみや美や喜びなどの既存の概念によって包摂されない心的概念であると推定できる。

5 今後の課題

本研究では、ユーモアと呼ばれる概念の明確化を試み、特異性を描写することを目的として、次の作業を行った。初めに、和文献における定義を参照し、定義の多義性と問題点を記述した。次に、英語の心理学辞典を参照し、英語の humor の第一義がおかしさの感知を引き出す刺激の性質であって、心のはたらきではないことを示した。さらに、国語辞書が示すユーモアの第一義が、英語の第一義とは異なることを確認した。

日本語におけるユーモアの概念は、和を尊ぶ精神を基とするあたたかで寛大な人間性や、叡智や品性に代表される美徳に特徴づけられる。英語の humor は必ずしも善良な性質を意味しないが、海外の研究が論じる humor 概念のポジティブな側面と、日本語のユーモア概念との関連性を論じることは、今後のユーモア研究に残された課題のひとつである。

概念の多義性が、必ずしも研究の発展を阻害するわけではない。ある用法が辞書に記載されていないからといって、その用法が誤りであるとはいえない。パラダイムの転換に伴い、新しい概念や用法が提案されることもあろう。その場合にも、概念の明確化を試みることは必要な作業である（村山，2012）。

ある概念に対して、唯一絶対の定義を示すことは不可能である。しかし、概念を明確にしないで理論を構築することは困難である。そこで、本論文では、既存の心的概念と比較しながら特徴を記述する手法を用いて、おかしみ概念の明確化を試みた。

おかしみが他の概念で置き換え可能であるならば、あえて新しい概念を持ち出して議論を複雑にすべきではない。しかし、おかしみと他の概念を比較検討した結果、おかしみは、既存の概念で置き換えることができない特異な概念であることが示唆された。

忘れてはならない点は、人の意識が無数の要素の融合だという点である。心理学的には意思と欲求が異なる心の働きであるとしても、実際には、欲することと意図することを、厳密に区分することは困難である。概念は家族的同類性によって結ばれており（Wittgenstein, 1969 山本訳）、これに加えて、日常的な言語で描写されるおかしみの体験は、次元が圧縮されてさまざまな心的要素の境界が見出せない状態であると考えるのが適切であろう。

心理学は、実証的手法の導入によって学問として独立した背景を持つ。人間の体験を要素に分解することは、その体験の本来のありようを失わせることでもあるから、おかしみを分解すれば、その魅力を色褪せたものにするかもしれない。しかし、対象を詳細に観察し記述を把握することは、理解の基本である。人体を扱う医師が患者の身体状況を十分に把握するためには、身体各部の組織と構造を熟知することが必要であるように、人の心の解明を目指す心理学には心的機能の各側面を記述するための言語が必要である。本論文が、人の普遍的な心理の一側面であるおかしみの機序を解明する確かな一歩となることを期待する。本論文では、概念の特徴と定義に焦点をあてて論じた。他の考察は今後の課題としたい。

利益相反に関する情報開示

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

阿刀田高（2001）ユーモア革命　文藝春秋

Auerbach, S., Ruch, W., & Fehling, A. （2016）. Positive emotions elicited by clowns and nurses: An experimental study in a hospital setting. *Transitional Issues in psychological sciences*, *2*, 14–24.

阿部晋吾（2018）夫婦を対象としたユーモアコーピングトレーニングの有効性―高自己愛者への介入に注目して―　梅花女子大学心理こども学部紀要，*8*，10–16.

秋元頼孝・宮澤志保（2011）アイロニーの受け取り方を規定する要因の検討　心理学研究，*82*，370–378.

雨宮俊彦（2016）笑いとユーモアの心理学　ミネルヴァ書房

Billig, M.（2005）. *Laughter and ridicule: Toward a social critique of humor*. London: Sage Publications Ltd.（ビリッグ, M. 鈴木聡志訳（2011）笑いと嘲り―ユーモアのダークサイド―　新曜社）

Coleman, A. W.（Ed.）.（2006）. *A dictionary of psychology*. NY: Oxford University Press.

デーケン, A.（1995）ユーモアは老いと死の妙薬―死生学のすすめ―　講談社

Deckers, L. & Ruch, W.（1992）. The Situational Humor Response Questionnaire（SHRQ）as a test of “sense of humour”: a validity study in the field of humour appreciation. *Personality and individual differences*, *13*, 1149–1152.

Deuter, M., Bradbery, J., Turnbull, J. （2015）. *Oxford Advanced Lerner’s dictionary of current English*（9th ed.）. UK: Oxford University Press

Freud, S.（1905）Der Witz und seine beziehung zum unbewussten. In S. Freud,（1972）. *Sigmund Freud gesammelte werke*（Vols. 1–17）. nachtragsband zur auffassung der aphasien. London: the institute of psycho–analysis.（フロイト, S. 中岡成文・太寿堂真・多賀健太郎（訳）（2010）機知―その無意識との関係―　加藤敏・石田雄一・大宮勘一郎（訳）フロイト全集 8　岩波書店）

Freud, S. （1928）. Der Humor. In S. Freud,（1972）. *Sigmund Freud gesammelte werke*（Vols. 1–17）. nachtragsband zur auffassung deraphasien. London: the institute of psycho–analysis.（フロイト, S. 石田雄一（訳）（2010）フモール 加藤敏・石田雄一・大宮勘一郎（訳）フロイト全集 19（pp. 267–274）　岩波書店）

Gruner, C. R. （1997）. *The game of humor*. New Jersey: Transaction Publications.

葉山大地・櫻井茂男（2008）友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響　心理学研究，*79*，18–26.

渕上美海・石田弓（2019）青年の境界例心性とユーモアの媒介効果―母親の境界例心性から青年の境界例心性への影響に着目して―　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，*17*，66–81.

Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, Jr., R. B.（2011）. *Inside jokes: Using humor to reserve–engineer the mind*. Cambridge: MIT Press.（ハーレー, M. M.・デネット, D. C.・アダムス Jr., R. B. 片岡宏仁（訳）（2015）ヒトはなぜ笑うのか―ユーモアが存在する理由―　勁草書房）

井上宏・織田正吉・昇幹夫（1997）笑いの研究―ユーモア・センスをみがくために―　フォー・ユー

井上宏（2004）笑い学のすすめ　世界思想社

伊藤大幸（2009）感情現象としてのユーモアの生起過程　心理学評論，*52*，469–487.

入谷敏男（1979）「ユーモア」の構造と機能 ユリイカ 詩と批評（pp.70–75）青土社

Kant, I. （1914）. *Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft/Kritik der Urteilskraft*（*Herausgegeben von Otto Buek*）In I. Kants Werke. *Herausgegeben von Ernst Cassirer*. Band V.（カント, I. 牧野英二（訳）（1999）カント全集 8 判断力批判　上　岩波書店）

木村寛（2020）笑いの哲学　講談社

木村洋二（1983）笑いの社会学　世界思想社

木村洋二（編）（2010）笑いを科学する―ユーモア・サイエンスへの招待―　新曜社

児玉真樹子・川森大典・高本雪子・深田博己（2004）説得に及ぼすユーモアの効果とその生起機制　広島大学心理学研究，*4*，63–76.

Kuhlman, T. L. （1984）. *Humor and psychotherapy*. Homewood, IL: Dow Jones–Irwin Dorsey Professional Books.

椙本知子・山崎勝之（2011）対人ストレスユーモアコーピングが敵意，意識的防衛性と抑うつに及ぼす影響　心理学研究，*82*，9–15

Lefcourt, H. M.（2001）. *Humor: The psychology of living buoyantly*. NY: Kluwer Academic / Plenum Publishers.

李津娥（1996）広告効果に及ぼす知覚されたユーモアの影響―消費者の広告評価および製品関与の影響を中心として―　社会心理学研究，*12*，135–145.

牧野幸志（1999）説得に及ぼすユーモアの効果とその生起メカニズムの検討　実験社会心理学研究，*39*，86-102.

丸山淳市・藤桂（2017）職場におけるフォロワーが表出するユーモアの循環的影響　心理学研究，*88*，317-326.

丸山淳市・藤桂（2022）職場ユーモアが創造性の発揮に及ぼす影響―心理的安全性の役割に着目して―　産業・組織心理学研究，*35*，381-392.

Martin, R. A.（2007）. Introduction to the psychology of humor, *The psychology of humor: an integrative approach*（pp.1-30）. UK: Elsevier Inc.

Martin, R. A., & Ford, T. E.（2018）. *The psychology of humor: an integrative approach*（*2nd ed.*）. UK: Elsevier.

Martin, R. A., Lastuk, J. M., Jeffery, J., Vernon, P. A., & Veserka, L.（2012）. Relationships between the Dark Triad and humor styles: A replication and extension. *Personality and Individual Differences*, *52*, 178-182.

Maslow, A. H.（1968）. *Toward a psychology of being*（*2nd ed.*）. NY: Van Nostrand Reinhold.（マズロー，A. H. 上田吉一（訳）（1998）．完全なる人間―魂のめざすもの―第 2 版　誠信書房）

増山栄太郎（2002）オチのオカシサの多変量解析による研究 柳井晴夫・岡太彬訓・繁桝算男・高木廣文・岩崎学　多変量解析ハンドブック（pp.746-756）朝倉書店

松村明（監修）（1995）大辞泉　小学館

松村明・三省堂編集所（編）（2019）大辞林第 4 版三省堂

松阪崇久（2008）笑いの起源と進化　心理学評論，*51*，431-336

松阪崇久（2021）笑う 小田亮・橋彌和秀・大坪庸介・平石界 進化でわかる人間行動の事典（pp.247-253）朝倉書店

May, R.（1953）. *Man's search for himself.* W. W. Norton & Company.（メイ, R. 小野泰博（訳）（1970）ロロ・メイ著作集 1　失われし自我をもとめて　誠信書房）

宮戸美樹・上野行良（1996）ユーモアの支援的効果の検討―支援的ユーモア思考尺度の構成―　心理学研究，*67*，270-277.

森下伸也（1996）ユーモアの社会学　世界思想社

Morreall, J.（1983）. *Taking laughter seriously.* NY: State University of New York Press.（モリオール，J. 森下伸也（訳）（1995）ユーモア社会を求めて―笑いの人間学―　新曜社）

Morreall, J.（1987）. A new theory of laughter. In J. Morreall （Ed.）, *The philosophy of laughter and humor*（pp.128-138）. NY: State university of New York Press.

村山航（2012）妥当性―概念の歴史的変遷と心理測定学的観点からの考察―　教育心理学年報，*51*，118-130.

中村亨（2002）笑いにおける表情と呼吸の反応時間差の分析―自然な笑いと作り笑いの比較―　人間工学，*38*，95-103.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2009）日本国語大辞典第 2 版第 13 巻　小学館

新村出（編）（2018）広辞苑第 7 版　岩波書店

野村亮太・丸野俊一（2008a）ユーモア生成モデルの一般性の検討　日本心理学会第 72 回大会論文集，763.

野村亮太・丸野俊一（2008b）ユーモア生成理論の展望―動的理解精緻化理論の提案―　心理学評論，*51*，500-535.

小此木啓吾（1979）精神分析からみたユーモアと笑い　ユリイカ　詩と批評（pp.49-54）　青土社

織田正吉（1979）笑いとユーモア　筑摩書房

Peterson, C. & Seligman, P.（2004）. *Character strength and virtues: a handbook and classification. American psychological association*, UK: Oxford University Press.

Ruch, W. & Hehl, F-J.（1998）. A two-mode model of humor appreciation: Its relation to aesthetic appreciation and simplicity-complexity of personality. In W. Ruch（Ed）, *Humor Research 3 The sense of humor: Explorations of a personality characteristic*（pp.109-142）. Berlin: Mouton de Gryuter.

佐々木健一（2019）増補版美学への招待　中公新書

佐金武・佐伯大輔・高梨友宏（編）（2020）ユーモア解体新書―笑いをめぐる人間学の試み―　清文堂出版

志水彰・角辻豊・中村真（1994）人はなぜ笑うのか―笑いの精神生理学―　講談社

椎野睦（2011）ナラティブ・アプローチにおけるユーモアのバイソシエーション効果　カウンセリング研究，*44*，60-68.

South, L. A., Elton, J., & Lietzenmayer, A. M.（2020）. Communication death with humor: Humor types and functions in death over dinner conversation. *Death Studies*, 1-9. Retrieved from https://10.1080/07481187.2020.1716883

Spencer, H.（1860）. *The physiology of laughter*. Macmillan's Magazine, March.

末神翔・道又爾（2011）カテゴリの定義規則がカテゴリカル知覚の生起に及ぼす影響　認知心理学研究，*9*，9-17.

橘玲子・運上司子・間籐侑・真壁あさみ・浅田知子・池宮真由美（2012）絵本と笑い・ユーモアについて　新潟青陵大学大学院臨床心理学研究，*6*，5-13.

高岡しの・松見淳子（2017）日本語版ユーモアスタイル

質問紙の信頼性・妥当性の検討　パーソナリティ研究，*26*，157-159.

高下保幸（1999）笑い　中島義明・安藤清井・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典（p.912）　有斐閣

外山滋比古（2003）ユーモアのレッスン　中公新書

Tugade, M. M., Devlin, H. C., & Fredrickson, B. L.（2014）. Infusing Positive Emotions into Life: The Broaden-and-Build theory and a dual-process model of resilience. In M. M. Tugade, M. N. Shiota, L. D. Kirby（Eds.）, *Handbook of positive emotions*（pp.28-43）. NY: The Guilford Press.

塚脇涼太・樋口匡貴・深田博己（2009）ユーモア表出と自己受容，攻撃性，愛他性との関係　心理学研究，*80*，339-344.

塚脇涼太・越良子・樋口匡貴・深田博己（2009）なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか？―ユーモア表出動機の検討―　心理学研究，*80*，397-404.

塚脇涼太・深田博己・樋口匡貴（2011）ユーモア表出が表出者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程実験社会心理学研究，*51*，43-51.

塚脇涼太・平川真（2012）ユーモア表出及びその動機と心理社会的健康　パーソナリティ研究，*21*，53-62.

上野行良（1992）ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について　社会心理学研究，*7*，112-120.

上野行良（1993）ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係　心理学研究，*64*，247-254.

梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明（監修）（1995）日本語大辞典第２版　講談社

Weber, M., Ruch, W., Riemann, R., Spinath, F. M., & Angleitner, A.（2014）. A Twin Study on Humor Appreciation: The Importance of Separating Structure and Content. *Journal of Individual Differences, 35*, 130-136.

Wittgenstein, L.（1969）. *Philosophische Grammatik*, Teil 1. Basil Blackwell.（ウィトゲンシュタイン, L. 山本信（訳）（1975）哲学的文法１　山本信・大森荘蔵（編）ウィトゲンシュタイン全集３　大修館書店）

Zeigler-Hill, V., & Marcus, D. K.（2016）. *The dark side of personality: Science and practice in social, personality, and clinical psychology*. USA: American Psychological Association.（ジーグラー・ヒル, Z. & マークス, D. K. 下司忠大・阿部晋吾・小塩真司（監訳）（2021）パーソナリティのダークサイド―社会・人格・臨床心理学による科学と実践―　福村出版）

Ziv, A.（1984）. *Personality and Sense of humor*. Springer.（ジッブ，A. 高下保幸（訳）（1995）ユーモアの心理学大修館書店）

注

＊本論文は、2021年度関西大学学術研究員制度の助成を受けた研究成果の一部である。本論文と同じ主題の論考が他にあるが、本論文とは異なる方法論で記述した論考であるため、ここには引用しないものとする。

1）笑いが人間特有であるという考え方は今日では否定されている（e.g., 松阪，2008）が、ここでは正確を期して原文のまま転載した。

2）一般社団法人日本心理学諸学会連合 https://jupa.jp/category2/syogakkai.html（2022年12月27日）

3）この3点は日本パーソナリティ心理学会の学会誌『パーソナリティ研究』に掲載された論文である。

4）同一著者により同じアプローチの論文が公刊済であったため、公刊済の論文のほうを対象とした。

5）日本国語辞典第２版によると、東京日日新聞の明治39年正月の記事に『吾輩は猫である』を評して「或は之を以てユーモアの上乗なるものとし」とする文章があり、ユーモアが味わいのあるおかしさとして理解されていたことがうかがえる。

6）日常的には、ユーモアの感想として、「おかしい」よりも「おもしろい」のほうが自然な表現かもしれない。おかしさが不自然さの検知に起因することに鑑みれば、「おもしろい」のような解釈に幅のある表現が好まれるのは道理である。感想を述べるときに、ぼかした表現が選ばれやすいことは、「かわいい」や「やばい」という曖昧表現が多用される事実からも窺い知ることができる。本論文では、心的概念としての明確さを重視し、意味が比較的明確な「おかしさ / おかしみ」を選択するが、文学的表現や会話表現としての良し悪しは、本論の主題とは異なる問題として捉えるのが妥当である。

7）「おもしろさ」をユーモアの定義に採用する野村・丸野（2008）の論考は、会話や落語を楽しむ際の味わいを念頭において理論を構築している点で、本論文と射程が異なる。よって、野村・丸野（2008）の理論は、本論文の主張と対立するものではなく、安易に比較できない関係性にあると考える。

Examination and Comparison of the Definition of “Humor” between English and Japanese as a Psychological Construct.

MORITA Ayako

Abstract

Problems and Objectives Humor has been defined variously by researchers. The aim of this study is to summarize the definitions of humor of previous studies, and to revise the concept of humor as a psychological construct, describing its uniqueness.

Methods and Results First, 147 articles were collected and divided according to the way of how to define humor. Each group of articles was compared to show that there are several contradictions among their definitions of humor. There seems to be some misconceptions about humor and needs to make a revision of its definition. Next, examination was demonstrated to clarify the concept of humor as a psychological construct. Finally, the details of uniqueness of the concept of humor were described and a few tips for researchers to approach humor experiences were proposed.

Key words: humor, laughter, concept, definition, amusing experience